

「パブリック」が苦手な 国家とその国民

「パブリックスペースの多様なたのしみ」について論じる前に、最初に「我が国でのパブリックと国民の成熟度」について私なりの考察を試みたい。

異なる意味の理解に大きな開き

「パブリック」という言葉には空間概念がつきまとう。さらに「パブリック」には官立や国家なイメージが濃厚に付随する。「パブリック・スクール」すなわち「公立学校」という間違った日本語訳が現在でも信じられている所以かもしれない。正確には英国ではパブリック・スクールは私立学校である。これではまったく概念も実態もまったく逆であると言わざるを得ない。

ゆえに非常に不思議なことではあるが、「パブリック」公共・国家、官立』なる図式が成り立ち、ひいては何やら窮屈なイメージがこびりつき、遂に人々は、パブリックに接することが苦手という現象が常態となっているのではないだろうか。

極端な例では、パブリックに対して国民、ある

パブリックスペースが 生きるデザイン

二見 恵美子 Written by Emiko Futami

いは市民が牙をむき出して国家に対峙することと珍しくない。

今をさる三〇年前、昭和五三年三月に成田空港占拠事件が起きた。開港反対派が「開港阻止」決起大会を開催し、数百人が空港内に突入、十数人が管制室を占拠した。結果、開港は遅れ、五月二〇日に四千米のA滑走路一本のみで開港した。この前後、地元住民だけでなく新左翼各派も加わり激しい反対運動が展開された。

私は、この事件は視点を変えると、日本においてパブリックとは何なのか、プライベートとは何なのかを如実に物語っているとさえ思っている。奇しくも一九六〇年代から七〇年代は、空港や交通手段など、まさに公共施設に新しい時代が起こりつつあった。しかも日本だけではなく、欧米でもそうした動きが同時に起こっていた。しかし、結論から言えば、サンフランシスコの郊外電車を開通するのに住民の反対運動は起こらなかった。パリのシャル・ドゴール空港でも然りであった。シャル・ドゴール空港の場合は、空港予定地の地主はたった三人で、反対運動などは皆無だったと聞いている。

パブリックとは、人々の積極的参加がなければ成り立たない。もともとパブリックとは市民のものである。国家は市民から成り立っている。成田空港の場合は、日本では土地という価値観が欧米とは異なるけれど、公と私ことの認識が明確化されてないことなどから問題も生じたと考えられる。サンフランシスコの郊外電車とパリのシャル・ドゴール空港の場合は、パブリックで

あるがゆえに市民の利益を優先する考えのもとに土地を提供した。便利になることで地元のみならず世界中から人々が集まり、やがて市民の利益につながるという考え方だ。

成田空港の場合は、一方で先祖伝来の土地に執着することで問題解決しようとしたことに加え、公と私の認識が海外の例とは決定的に異なることにより問題が複雑化したという見方もできる。ゆえに異なる両者の間に明暗が分かれたとも言えるのではないだろうか。

パブリックに配慮「抑制の中の美学」

ロンドンに六年程暮らした時の体験では向こうの住宅は表の顔であるフロントヤード(前庭)とバックヤード(裏庭)の区別がはっきりしており、公共に面した窓や前庭では街の景観との一体感に気が配られている。街全体で色彩や材質などさまざまな規制があるのはいうまでもないが、それぞれが規制を受け入れ、かつ工夫を凝らしており、結果として個性を発揮しつつ全体の統一感と調和のある街並みが生まれている。公共性を帯びた前庭など個人のものであるとしても公共に奉仕するといった精神が伝統として受け継がれているのである。「秩序の中の個性」「抑制の中の美学」とでも表現したくなるほど街並みパブリックが美しいのはその所以かもしれない。

最後に、もうひとつの例を紹介することで私が考えるパブリックとは何かを解説しておこう。

すべての人々に還元される利益を

大阪・梅田の「北ヤード都市計画原案」が先日紙面を賑わせていた。私の印象を手短に言うところ、計画では北側に位置する緑地が極めて小さいことに驚いた。商業空間としての公共的空間を優先することに反対するわけではないが、厳密に言つと「公共的商業空間」と「公共空間」の落差があまりにも極端であることに軽いショックを覚えた。成田空港と同じような構図が読み取れたからだ。

いわゆるパブリック空間である緑地をはるかに上回る公共的商業空間が私企業の有するプライベートな空間であるとするならば、それら二つのコントラストは、大阪では今もってパブリックという概念、価値観が顧みられていないことを示すのではないか。そうした思いが強く残るのは、北ヤードの緑地が一千五百㎡が二千㎡だとしても、全体からすれば先行開発区域の約7haに比較すればほんのわずかでしかないからだ。

緑地をもっと大きくすることで、大阪への認識も変化し、やがて公園都市という側面を持てば、もっと長いスパンで利益還元できるのではないだろうか。

パブリックとは、社会の、人々の、市民の、そして国民の利益につながり、社会全体が豊かになる根本的考えではないのだろうか。短期間の利益だけを見ていては、国益、つまりパブリックな利益には結びつかないと思うのだが。

大阪に來られた海外の有識者は口をそろえて、「大阪が国際都市になるためには、大規模な公園を市内のど真ん中に造るべきだ」と言う。

調べてみると、ニューヨークのセントラルパークは、なんと四百三十万㎡、ロンドンのハイドパークは四百十六万㎡、日比谷公園の一〇倍にあたる。大阪の都心にある中之島公園は約一〇万㎡程度、市民一人あたりの公園面積は、政令指定都市で大阪市が最も狭いというデータがある。JR大阪駅北地区(梅田北ヤード)は二四万㎡あり、パリのリュクスンブル公園とほぼ同じ大きさ、一等地に公園というゆとりある発想の転換が期待されている。

都心のビルが

パブリックスペースになる時

私の景観デザイン事務所は大阪の中心・淀屋橋近くのレトロ建築(大正一四年築)にある。事務所を開設した二〇年前は、いつ壊されてもおかしくないほど古ぼけて老朽化していた。しかし趣のある建築だったので、蘇生させることをビルの持ち主に提案した。建物の顔ともいえるファサードと中庭を再生するため、各々テナントに色彩・材質・サイン統一を依頼した時、多く

の人が反対した。その時、一人の利益・趣味を優先させるのではなく、建物全体が街の景観にどれほど寄与するかを考えてほしいと説得し同意を得たのだうた。

ビルは蘇生され、後日、文化庁から登録文化財に推薦された時、建物の持ち主は、自分のものに規制されるのはまづびら」と断った。その折も、この建物蘇生がモデルケースになれば、周辺のレトロ建築を残すオーナーも増えるはず。それは街全体の活性化につながり、やがて建物の資産価値も上がると説得した。当時、誰もが半信半疑だったと思うが、事実そのとおりになった。

二〇年前は、大阪の近代名建築一〇選の中にいかなかった建物は、今では、大阪市のアイドル的存在になり入居希望者が列をなすほどのビルになっている。

この建物が、それ以上に素敵に変身したのは



船場ビルディング(ふきぬけの中庭)を緑でリニューアル



船場ビルディング(蘇生前)の玄関と中庭。数台の自販機、自転車などが点在していた

アールコート屋上庭園の10年目の景観

- (1) 本物であること
 - (2) 先見性とオリジナリティーがあること
 - (3) 色彩、材質など細部まで統一感を持ってデザインされたこと
 - (4) 地球環境問題・景観といった大きな視野で検討されたこと
- などがあげられる。

パブリックスペースとしての 屋上庭園(成功例)

大阪は、緑被率六%と全国的に見ても緑が少ない都市である。東京都のように大名屋敷の庭が公園になつたのではなく、古来より埋め立てを繰り返して造られた商業都市である

から、苦勞して造つた高価な土地を公園にすることは考えられない、といつことのようなのだ。しかし、建物の屋上はほとんど使用されておらず、屋上をパブリックスペースにすることは合理的な打開策だと捉えられている。最近では、地球環境対策、省エネの問題もあり、公共施設、企業、学校、病院へと広がりを見せ始めた。

実例 1 ● 公共施設

大阪湊町開発センター OCAT屋上庭園

4,600m²



OCAT屋上庭園

巨大で素晴らしいとされる公共施設を造つても、数年後には閑散とした街になっている例は多い。実は、大阪ナンバの駅ビル「OCAT」もバブル崩壊後テナントが流出し、「ゴーストタウンになる」などと新聞に書かれたこともあり、巨額の赤字を抱えていた。しかし、屋上庭園を、再生の目玉に、完成後、一年足らずで全体の売り上げが約一〇%上昇するといった快挙も成し遂げた。

今まで「街づくり」という都市景観に関わる大切なことが、とりあえず公園・建物を造ることに終始して進行し、真のパブリックとしての景観や居心地のよさなどがな

いがしろにされてきたのではないだろうか。二一世紀のパブリックスペースは、具体的な効果の有無も見据えた長期計画が必要と思うのだが。

事例2 ● 企業

京都工業団地の屋上庭園

1,200m²

緑が人の意識も変えていく

京都の南、久御山町工業団地。あまりにも緑が少なく殺伐としていた地に、今、変化が起きている。ある企業が、敷地内の緑化整備をし、屋上庭園を設置した。当時、世界の環境協定が結ばれた京都議定書の会議は京都で開催されたが、京都には緑が多いと役所の意識は非常に低かった。

そこで、毎年、環境問題や緑化の意識を高めるための研修会を開き、その後、必ず屋上庭園で語らいの時間を設けた。三年間続けた結果、大手企業トップクラスの人たちが関心を持つようになり、役所でも二〇〇七年度緑化の助成金を実施する前向きな方針が発表された。

今や、この企業の屋上庭園は京都における草分け的存在となり、

社会貢献が社内外にも及び、現在、京都府の体験ツアープランに組み込まれ、京都の集客にも一役買っている国内・海外からの年間来場者三千人以上。



京都光華女子大学



事例3 ● 病院 滋賀県市民病院

56,000m²

高い塀をめぐらさない開放的な病院の
パブリック公園と4ヶ所の屋上庭園

四季を感じ、光と風が香る快適空間、緑豊かな丘陵、森の中の病院といったイメージを大切に、周囲の環境との連続性を考慮し、調和をとった病院であり市民の「パブリックスペース」となっている。四ヶ所の屋上庭園は、それぞれ異なるコンセプトで東西南北に位置し、入院患者、外来客も使用可能である。また市民ボランティアグループとの連携による庭園維持管理も工夫し、病院への愛着が増す仕組みを作っている。

事例4 ● 学校 京都の私立学園

2,000m²

屋上庭園は学生の実習場でもあるため、植物の維持管理も教員と学生が交流しながら行うシステムを考えた。

また、父兄や近隣の人たちのパブ

リックスペースとして、昼食や休息にも快適なスペースとして活用されている。今、京都の大学では初めての試みとして注目されている。

以上の屋上庭園がパブリックスペースとして成功している要因は

- (1) 単に緑化ではなく物語性のある庭園としてデザインされていること
 - (2) 地面の公園より開放的、安全、快適性があること
 - (3) 夏は涼しく、夜間利用など多くのメリットがあること
 - (4) 都心の屋上で自然を満喫できる楽しみ(野鳥の飛来・果樹・野菜など)があること
 - (5) 地球環境への配慮が内外のイメージアップにつながっていること
- などである。

詳しくはLandscape design office E.M.I. PROJECT ホームページ (www.emi-web.com) を参照された。

□ 一見 恵美子(ふたみ えみこ)

美術大学卒業後、デザイン関連の企業勤務を経て、英・米に留学。本場のランドスケープを習得する。帰国後、Landscape design office E.M.I. PROJECT を設立。「環境改善のための仕事」をポリシーに幅広く活躍。一九九八年大正時代レトロ建築の修復と屋上庭園で、みどりの景観賞受賞。九九年設計の「OCAT 屋上庭園」は建設大臣賞受賞。主な著書は、『一見恵美子のランドスケープスタイル』(パールバック出版)、『樹と花のガーデニング』(ひかりのくに)など。